
ときに、魔の大地に楽園を築く夢を見て。

まいまい？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ときに、魔の大地に楽園を築く夢を見て。

【Nコード】

N1108R

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

私はこの星の人間ではない。
いわゆる「宇宙人」というやつである。

私の乗った調査小型船が壊れてこの星に不時着したのだ。母船に連絡は入れたが仲間が来るまでの間、この星で生活しなくてはならない。

私はこの星の人間ではない。
いわゆる『宇宙人』というやつである。

私の乗った調査小型船が壊れてこの星に不時着したのだ。母船に連絡は入れたが仲間が来るまでの間、この星で生活しなくてはならない。

この星の隅々まで調べたわけではないのだが、今のところは、この星は私にとって致命的になるような現象はなかった。しかし、この星には少しだけ住みにくいのだ。味も気温も空気も、全てが温^{ぬく}くて薄かったのである。

事前に住みやすい地域を見つけていれば良かったのだが、急な出来事であったので、贅沢は言っていられない。

空気も薄いので疲れやすかったが、この星の生物に擬態し、体力のないかよわい女性を装えば、怪しまれることなくなじむことはできそうだ。そして、何よりも救いだっただのは、私たちにとっての毒でさえこの星に存在する量では薄くて効果をなさないということだった。

私はこの世界に住む生命体に擬態する。
変化をし終えると、私はこの地域の平均的な女性へと姿が変わっていた。

そして、この星については少し調査していたので、それを元に言葉や文化といった知識を脳内に注入した。多少の誤差は、現地で収集して修正していくしかないだろう。

ひとつおりの事を済ますと私は不時着した船を隠した。こうして

おけば、原住民に気づかれることはない。そして私の仲間が助けが来た時には、回収してくれるだろう。

ふらふらしながらも、近くの町にたどり着いた。少し歩いただけでもこれだ。先が思いやられる。

私は町についてすぐ、宿を探した。

ちなみにこの星の通貨は複製してあるので問題なく泊まれるだろう。足りなくなったら、また複製すればいい。どうせ少しの期間しかないのだ、この国の社会に打撃を与えるほどの量にはならないだろう。

女性が一人で泊まるのは怪しまれそうなので、それらしい事情を作り上げ宿の人に説明した。簡単にまとめると、このような感じの話で通してある。

『この町の近くで野党に襲われて兄と二人で助かったものの、私は少しからだが弱いので、そのまま旅をするわけにはいかなかった。ちょうど近くにこの町があったのでそこまで私を送り届けた後、兄が一足先に帰り、私のために新しい乗り物を用意して迎えに来てくれる。私はこの通り少し運動しただけでも疲れてしまうから、乗り物も少し改良を加えなくていけない……だから、この町で乗り物を借りるわけには行かなくて、兄が迎えに来るまでこの町で待つている』

まあ、仲間の船が迎えが来るまでここで待つものだから、あながち嘘ではない。

私は体力を温存する意味をこめて大抵は眠ってすごしている。病弱な設定なので、一日中眠っていても怪しまれることはない。

あまり眠っていても体に悪いので、私が『今日は調子がいい』と定めた日には、時々は出歩いている。すぐに体力を消耗してしまうため、長時間の探索は無理であったが。

この星の情報を集めていて気がついたことは、この星の人間たちは精神世界が幼く不安定ということである。

食料が豊富な時期や大きな災害がない時代ならば平穏で平和であるが、ひとたびそれが失われそうになると、欲しい物は血を流してでも奪ったり、信じるものの違いで争いが起きたり、不安、疑心暗鬼、嫉妬、欲望、虚無に満たされた悪循環に満たされてしまうのだ。しかも、災いが起きれば、まじないや呪いのせいにし、妖しい雰囲気のある者たちや、時には気に入らないから腹いせにという理由で罪のない者たちが、悪魔の使いとしてあらぬ罪をかぶせられ、二工となって大地に還っていった。

今、この国はその魔の連鎖の中にある。この村も例外ではなく、人々はその言い知れぬ恐怖におびえていた。

私は知っている。

それは『魔女狩り』であると。

私の星にも大昔実際にあった出来事である。しかし、歴史の教科書でしか見たことがないような事であったので、どこか他人事のように全く実感がなかった。

この町に来て数日。このまま何事もなく、日々は過ぎていくものと思われた。

しかし、あの男が現れた。

私はこの国の平均的な女性の姿をしている。平均的な外見とは、取り立てて目立つ特徴はないが、欠点がないということになる。そして、体が弱いという事や身の上が、薄幸（幸せまで薄いのか）の美女のごとく映ったのだろう、どこからか噂を聞きつけて『お金持ちの男』が現れたのだ。

その男は、私を見るなり頬を赤く染めた。どうやら、一目ぼれというやつをしたらしい。私はこの男に言い寄られて悪い気はしなかったが、私はこの星の生物ではない。形こそ似せてはいるが全くの別物なのだ。うれしい反面、その気持ちに答える事はできない事情もあるので、困惑してしまった。

「私一人では決められない」と、そう濁すことにした。

この国では、まだ自由恋愛はそれほど一般的ではなかった。女というのは家に付属するモノのような存在だったので、許婚やお見合いなど、相手は親や親族が持つてくるものだったのだ。だから、男も私の答えはもつともなことだとして、納得はしてくれなかった。

しかし、男は自らの館に私を招待すると言った。もしよければ、迎えが来るまでいてほしいとも。おそらくは、『兄』が来たら「あなたの妹をください！」とでも言う魂胆があると思われた。

下手に断って、宿の女将やこの町でお世話になった人たちに迷惑をかけるわけには行かないので、私はこの男の館に行くことに決めた。

迎えが来たら、記憶でも何でも操作すれば良いだけのことなのだ。

この男の館に世話になったのは、ほんの数日だと思う。

ある日、突然私は悪魔として告発されたのだ。
私は他所の者で身体が弱い。男を誘惑し、何か悪い病を撒き散らしている、私を告発した女はそれらしい理由を言った。
彼女はあの男を好いていたのだ。男の屋敷で暮らし始めた私を見て、何か勘違いをしたのだろう。つまり、私は嫉妬のとぼつちりを受けたわけだ。

で、私は今、牢屋の中にいる。

牢の中には、似たような境遇の人たちがいた。
彼らは生きて外の空気を吸えることはないだろう。

私は、魔女狩りについての知識を思い出す。かつて自らの星で起こった時の知識だが、まあそんなには変わらないだろう……

あれは拷問である。

あれは認めさせるだけの拷問。

認める認めないではなく、捕まるというだけでもうすでに悪魔なのだ。

しかし、自分はヒトではあるが、この星の純粋な人ではないのだ。その全ての儀式、拷問、何をされても耐えられる自信はある。少し痛いかもしれないが、外的要因では死なないのだ。彼らは、死ぬまでいろいろやるかもしれないが、死んだふりして逃げる機会はあるかもしれない。私はそう簡単に死ぬことはない、それだけがこの星での私の強みなのだ。

「……しかし、あれは儀式という名の処刑。精神的に耐えられるのか。火あぶり、水攻め……あと何がある？ 刺されたりするのだから。」

うか」

いくら簡単に死にはしない体と言っても、精神は普通の人間なのだ。たくさんの拷問は精神を蝕む。

それならば……さつさと、悪魔であることを認めただほうがいいのかもしれない。

悪魔であるというのを、さつさと認めてしまつて、不必要な拷問をすつ飛ばしてさつさと悪魔を清め殺すという儀式を受けて、生き残つて見せて、無罪放免と行ければいいのだが。

しかし、生き残つたことによつて悪魔だつて言われても、それはそれで自分が納得してしまひそうである。

案外冷静に状況を判断する。

そして、日が沈み空が闇に包まれ始めた。

暗くなるにつれて、おびえ始める牢の中の女たち。それは、夜の闇におびえているわけではない。それとは対照的に、牢の外の男たちにはやにやしだすのだ。

またひとり、またひとり、女がどこかへ連れて行かれる。これから何が行われるのか、私は見当がついた。

そして、ついに私は数人の男がいる部屋に連れて行かれた。

（あんな湿つた異星人の肌に触れるのは考えただけで、吐き気がするんだけれどな）

この星の人間は、汗という分泌物を出す。その温くぬくしめつたものは、不快以外の何物でもないのだ。このまま何もせずには弄ばれるのは癪なので、この際だから少しからかってみようと、虚構の物語を構築した。

「……いいことを教えようか？ 悪魔は穢れなんだろう？ いくら清めて力を封じた所に閉じ込めても、その本質は変わらない。そんなやつは近くで一晩裸で過ごしたら、どうなる？ 呪いを受けても文句は言えないよ？」

「ここは清めの場所だ、悪魔は力は使えない」

「悪魔を狩る者なのに、そんなことも知らないのか？ 君たちの仲間で、局部の酷い痛みや痒みで悩まされていたり、しかも、身内にもそういう症状がうつつたりして、最悪には狂ったり死んだりした人がいるだろう？」

私の発言に彼らはざわめいた。

やはり、思い当たる節があるのだろう。

「それは、悪魔の本質に触れてしまったための呪いだ。君たちのその燃え上がる本能を利用した悪魔たちの最後の悪魔の誘惑だ。その誘惑に惑わされ一晩ともにすると……後はわかるよね。君たちは呪いを受ける。これは、すぐには表に出ない。徐々に徐々に体を蝕んでいく。君たちも知っているはずだ。悪魔は儀式によって清めない限り悪魔である、そうだろう？ いくらここが聖なる場所で力が使えないといっても、悪魔の穢れたる所以の呪いは、その身を滅さない限りは消えることはない。悪魔は悪魔、気軽に触れないほうがいいよ？ 今からしようとしている行為は、悪魔の誘惑、悪魔の呪いを最後に振りまく抵抗。神の使者であるあなたたちの力をそぐための。だから、私が悪魔であるかもしれない以上、君たちが今私に触れるということは、その呪いを受けることになるんだよ」

「何をでたらめを」

「……はあ」

私はため息をする。あまり好んで異星人の生殖器官など『見た』

くはないのだが。

すでに下半身丸出しの男たちを観察する。

「そうだねえ、その呪いにかかっているのは……やっぱり何人かいるね。私には分かるんだ。君たちの中にその呪いが巣食ってオゾマシイ形をつくっているのが。もう、カビだらけだね。特に君と君……」

私は指差した。

「そろそろ自覚症状が出ていてもおかしくないのではないかい？
時折、夜も眠れないほど悩まされる」

そう言われた男は、言葉を聞かなくとも分かるくらいに震えていた。

「呪われたくなかったら、私にあんまり触れないほうがいいよ」

私は笑む。

「なぜ、それを知っている……？」

「なぜって？ だって、私は『悪魔』なのだろう？ 悪魔が悪魔の呪いについて知っていることに、何か疑問がある？ 君たちに『悪魔の呪い』がかかっているのを見て、しかも、だいぶ呪いが定着してきたから。だから、そろそろ呪いを受けている事実を教えて絶望する人間たちがみたくて、さ」

まるで悪魔であるかのように、残酷に残忍に笑んでいた。

「私はかまわないんだけど、どうする？ 呪い、うける？ 私の呪いは即効性のきついものにしておくよ」

これでももし、犯してくる者がいたら、私の体内で合成される物質で彼らの大切なモノを溶かしてしまうのも一興だな。

結局、男たちは何もせず私を牢に戻した。他の女たちがどうな

っているかは知らないが、気にしてもどうにかなるといふものではないだろう。

自分の貞操は無駄に守れたものの、確実に悪魔の道を歩んでいるような気がした。

「悪魔であることを認めたら、明日には『処刑』されちゃうかなあ。まあ、死なないけれど」

それは、浄化という名の処刑。

一度疑われたら、死ぬまで終わらない儀式。

しかし、この世界の火は、私にとって全く熱くはない。水に沈められても、私は水中は平気なのだ。食事に毒も入れられただろうけど、この星の人間に効く毒は私には効かない。仮に私にとっての毒だったとしても、中毒にも至らないほど、薄いのだ。私は、『悪魔』を浄化する儀式というやつ全て耐え生き残ってしまった。感想としては、案外ぬるかった。

呆然とする処刑者たちに、私は笑みを向けた。

「どうやら、私は『悪魔』ではないようだね。なにせ、聖なる火に焼かれても耐えたし、奇跡の水の底に沈められても平気だった、神に祝福された水を飲んでもぴんぴんしているし、聖剣にさされても傷はすぐにふさがったしね。君たち聖なる儀式から生還したんだ。悪魔なら死ぬ、それなら生きている私は邪な者じゃないということを実証したも同然だよ。しかもこんなに多くの人の前で公に、ね」

そう、私は核さえ無事ならば、復元できる体質なのだ。

「……わかった。あなたを解放しよう」

そう言っつて、私が開放された場所は、『神のいぶき』という土地であった。

そこは、この星の住人にとっては毒の大地であった。草木も動物も育たない死の大地である。結界というもので覆われているので、許可のない者は出入りができないという閉ざされた地であった。

「神に祝福された、あなたはこの地がふさわしい」

結局は、殺そうとするんですね……？

私は何も言わず結界の中へ入る。

彼らはそれを確認すると、足早に去っていった。

もう、彼らと会うことはないだろう。むしろ、もう会いたくはなかった。

私は『神のいぶき』と呼ばれる地を観察した。

「ここはすばらしいな」

私は思わず声が出てしまった。

この土地はこの星の人間なら、おそらく数日と経たないうちに死んでしまう死地という名の聖地。しかし、またしても彼らの誤算は、ここは私にとっては天国のような場所であったことであろう。

温度も湿度もちょうど良い。大気の濃度もすばらしい。そして何よりも、私たちがエネルギーとしている食べ物に近い無機物が自生していることであった。

実際のところ、私たちの持つ科学力を使えば、結界の外に出たいと思えば出られるのだが、今のところ頼まれても出る気はない。やっと見つけた住みやすい楽園なのだから。

これからずっと、この土地に住むのも悪くないかもしれない。やっと見つけた楽園なのだ。

私を迎えにきた人たちと此処で暮らすことになったら、どこかの御伽噺のように、この星に突然現れた魔の一族としてとて恐れる存在になるだろうか。この星の人間たちをすぐにどうこうするわけではないが、異質な私を彼らはそう呼ぶに違いないのだ。

私の仲間が来るまで、私はそれを夢見ている。

「迎えを待つつもりが、逆に迎えることになるとは」

しかし、私たちの長い旅は、ここで終わるのかもしれないのだ。

今はまだこの楽園にはイブが一人しかいないが、もうすぐアダムやイブとなる者たちが来る。

私はいつか来るであろう、宇宙を漂ってきた故郷の船を夢見ている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1108r/>

ときに、魔の大地に楽園を築く夢を見て。

2011年10月9日17時57分発行